

内田秀五郎のしごと

近代杉並の礎を築いたといっても過言ではない
「私心なき実行家」内田秀五郎の偉業の数々を
その生い立ちから追う。



本記事は主に『内田秀五郎翁』(以下、『翁』)、『内田秀五郎傳』(以下、『傳』)、『米寿秀五郎翁』(以下、『米寿』)、『東京農業の今昔』(以下、『今昔』)、『井荻町土地区画整理の研究—戦前期東京郊外の形成事例として—』(以下、『研究』)を参考に、独自取材を加え執筆・編集しました。
※内田秀五郎の関連資料には、資料ごとに記述が異なる部分があります。

杉並発展の基礎を築いた郷土の偉人

杉並区の歴史を語る上で欠かせない先人がいる。それは「私心なき実行家」といわれ、地域の発展のために、ある時は私財をなげうち、またある時は命を懸けた取り組みにより、今日の区の発展の礎を築いた井荻村の村長(のちに井荻町の町長)・内田秀五郎(うちだ ひでごろう 1876-1975)である。

大正末期から昭和初期にかけて実施した井荻村(のちに井荻町)全域の土地地区画整理事業をはじめ、電灯の敷設、金融機関の設立、西荻窪駅や中島飛行機東京工場、西武線3駅の誘致、水道等のインフラ整備、教育の充実、風致協会の設立など、偉業は多岐にわたる。

2022(令和4)年10月に杉並区区制施行90周年を迎える機会に、秀五郎の功績と生涯をたどってみたい。

生い立ち

秀五郎は1876(明治9)年11月1日、東京府武州多摩郡上井草村の内田藤吉とトリの長男として生まれた。内田家

は篤農家(※1)として知られ、村民からの信頼も厚かった。父親は地主兼自作農として三町歩(約3ha、約9,000坪)ほどを経営し、大麦・小麦・陸稲・藍葉・養蚕・製糸・製茶など、のちには沢庵(たくあん)作りまで手広く営んでいた。

幼い頃はひ弱で母親に心配をかけた秀五郎だが、やがて負けず嫌いで元気な子供に育っていった。1883(明治16)年、桃井学校(※2)に入学。尋常科4年、高等科4年の課程を修了後、家業を手伝った。

1896(明治29)年9月、父親が46歳で急逝し、秀五郎は19歳(満年齢、以下同じ)で一家を背負うことになった。その働きぶりは「星を戴いて野に出で、月を踏んで畑より帰るといふ、涙ぐましい程の家業のいそしみ方であった」(『翁』)という。

日本一若い村長

1905(明治38)年5月、村の長老たちの推挙により28歳で井荻村の収入役に就任する。

その頃の村の財政は非常に貧弱で



秀五郎の還暦・喜寿・米寿の時に発行された3冊の伝記など、本記事の参考にした書物



秀五郎の生家
(出典:『米寿秀五郎翁』)



村長時代の秀五郎。30歳代前半と思われる。
(出典:『内田秀五郎翁』)

乱脈を極めており、やがて村長が不祥事で辞職。1907(明治40)年5月、収入役として事務に精励し、模範的な執務ぶり町村関係法規の勉学などを

になった。晩年、「思いがけない収入役への出馬が、わたくしの後半の生涯をきめてしまった」(『今昔』)と語っている。

村長就任の際に収入役は退いたが、農会長との兼職であったため忙しさは続いた。それでも家業を人任せにせず、出勤前と退勤後には作業服姿で畑仕事にいそしむ毎日であった。

財政の確立と道路整備

収入役の頃から秀五郎が一貫して力を注いだのは村の財政の確立と道路整備である。

財政の確立

あまり大きな村ではないので、村の財政は乏しく、村政も乱れていた。そこで、まず実行したのは節約であった。特別な収入がない農村では、できるだけ支出を制限すること以外に財政を確立する



杉並の旧20カ村



1889(明治22)年に「市制・町村制」が施行され杉並地区は4つの村に再編された

方法はないと判断したからであった。

また、農家の経済的安定のため、1908(明治41)年に「井荻村勤儉貯金組合」を創設した。同年10月に官報により発布された戊申詔書(※4)に、国民は等しく勤儉貯蓄して、家業に励むべき、と述べられており、これを記念して村一同で設立したのである。

道路整備

道路の改修は、農産物の出荷に必要不可欠であった。

当時、村内には青梅街道、所沢道(現早稲田通り・旧早稲田通りの一部)、戸塚吉祥寺線(現通称女子大通り)の三つの府道が通っていたが、梅雨時や秋の長雨時には泥道になり、荷車の車輪がぬかるみにはまりひどく悩まされていた。また、里道の大部分は荷車など通れない道ばかりであった。そこで、村の土木委員と連携して、地区ごとに道路保持員を選出したり、他村町の道路を視察したりして、道路改修への機運を村内に高めていった。そして、砂利代を村費と地区とで折半し、労務は各地区で担当するという方法を取り、数年がかりで雨の日でもなんとか荷車が通れる道になった。

1919(大正8)年に道路法が発布施行されると、村内の道路の実測を行い、203路線を村道に認定した。「こんなわけで、わたくしは、村長になりたては、道

路の改修に熱心だったものですから、村の人たちから「道路村長」というあだ名をちょうだいしました」(『今昔』)。

教育の振興と慈善事業

井荻村教育会

教育にも熱心な秀五郎は、村内の有志と協議し、就学児童への支援・援助、就学の奨励、教育の普及などのため、1911(明治44)年「井荻村教育会」を創立し、会長に就任した。その後、教育会は17年間にわたり、就学児童の学用品の共同購入や貸与、生活の苦しい保護者に対して義務教育費の援助、成績優秀児童への賞品の授与など、教育の普及発展に力を尽くした。後年、秀五郎は「教育は村づくりの土台です」(『今昔』)と語っている。

井荻村慈善会

また、1912(明治45)年3月、村内有志の協力を得て「井荻村慈善会」を創設し、積極的に困窮する村民の救済に乗り



区画整理前の井荻村(出典:『内田秀五郎翁』)

出した。「その救済対象は、村民にして疾病に罹り生活困難なる者、不幸なやもめ暮しの人、孤児および災害に遭遇した人など不仕合せの人々を援助するほか、井荻村外の者と雖も村内に立入り、救助の必要があると認められた時は、これが救済に努めたのである」(『米寿』)。村内に物乞いが横行していたことから治安対策という意味合いもあった。

産業組合(※5)の設立

(28名の先駆者組合)

国の富国強兵政策と資本主義の台頭で、農家の生活は苦しくなるばかりであった。農家の救済は村政と共に農家相互の扶助にあると考えた秀五郎は「勤儉貯金組合の経験をいかして、まずわたくしどもの大字である旧上井草内の原、寺分、新町の三部落内に、第一井荻信用購買販売組合(※6)をつくることにしました。組合員は、たった二十八人という小組合でした。話にきくイギリスのロッチデール先駆者組合の創立者が二十八人の職工さん達です。いみじくも、わたくしの組合の創立者と同数というわけです。この組合は、明治四十三年十二月(一九一〇年)に設立され、大正七年十一月まで、十年間つづき、わたくしは、ずっとその組合長をつとめておりました」(『今昔』)と語っている。

1916(大正5)年1月、出席した東京府の産業組合講習会で、産業組合が産業振興上いかに必要な役割を果たすかを痛感し、試験的に運営してきた第一井荻信用購買販売組合を解散して、村全区域に広めることを決意。1918(大正7)年11月に「井荻信用購買販売利用組合」を設立、1944(昭和19)年に組合長を退任するまで農家の営農支援と生活の向上に尽力した(※7)。

電灯敷設

1921(大正10)年ごろの井荻村は、戸数672戸、人口4,443人で、城西の一農村にしか過ぎなかった。荻窪駅前付近も当時はまだ市街地化しておらず、肥料商が点在するのみで、数人が電灯を引きたいと希望してもかなわない状態であった。秀五郎は村の将来の発展を考えて、全村規模での電灯敷設に取りかかった。数十回にわたる「東京電燈会社」との交渉を経て、近隣の村に先駆けて1年ほどで全村の敷設を完了。「大正十年十一月十五日に電燈がついたわけですが、(中略)パツと電気のついた時の騒ぎは大変なもので、消灯するのに、口でプーッと吹いても消えないので、またひと騒ぎしたものです」(『今昔』)。

荻窪郵便局・荻窪電話局の開局

同時期、井荻村は中野郵便局の集配区域に属しており、一部を除いて集配は

1日1回、電信(電報)は翌日配達と不便だった。住民と郵便局の必要性を訴えていた村の高尾安郎氏が秀五郎に働きかけて、1922(大正11)年8月26日に荻窪駅元大踏切の北側(現杉並区上荻1丁目)に新築の「荻窪郵便局」が開局された(※8)。

その後、村民から電話敷設を望む声が上がってきたため、秀五郎は有志らと協議し通信省(※9)へ要請したところ、回線費用として1万円の寄付を求められた。そこで、加入希望者1人100円の寄付承諾を条件に募集を開始すると、申込者がたちどころに100人以上集まった。この結果に意を強くし、1922(大正11)年荻窪郵便局内に電話設置を申請。翌1923(大正12)年5月通信省に認可承認されると、同月秀五郎は自らを組合長とする「荻窪特設電話加入者組合」を設立し、翌6月同省へ1万円の納付

を完了した。

荻窪郵便局の2階に交換台を設置して、1924(大正13)年3月26日に電話が開通。「(かつては)電灯もなかった村に、チリンチリンと電話のベルがなりわたるようになりました」(『今昔』)(※10)。

西荻窪駅の開設と耕地整理事業

西荻窪駅の開設

新宿と八王子を結ぶ甲武鉄道(後のJR中央線)には、開業2年半後の1891(明治24)年12月に荻窪駅が開業されたものの、荻窪から先は吉祥寺まで駅がなく、中間地区の地元民からは新駅を望む声が強まっていた。

鉄道省が荻窪～吉祥寺間の新駅設置計画を立てていると伝え聞いた井荻村では、秀五郎を先頭に、新駅誘致の一大運動を展開することとなった。駅用地の寄付は最も苦心する問題だったが、



左:1934(昭和9)年5月竣工の「井荻信用組合」本店。『杉並風土記 上巻』によると「当時は信用組合が銀行より立派な建物を建てたと評判になった」そうである(出典:『内田秀五郎翁』)

中:1951(昭和26)年11月、信用金庫法に基づき組織を変更して「東邦信用金庫」と名称変更した(出典:『内田秀五郎傳』)

右:1922(大正11)年に開設された西荻窪駅。写真は南口ができた1938(昭和13)年以降と思われる。(写真:杉並区立郷土博物館)



左:1932(昭和7)年竣工の荻窪電話局。建築家・山田守による建物で、現存(出典:荻窪電話局開局記念絵葉書、杉並区立郷土博物館)

中:現在のNTT東日本荻窪ビル

右:区立荻窪中学校近くの善福寺川に架かる「耕整橋」。井荻村第一耕地整理事業の架橋といわれている

「内田村長を始めとした二、三土地有力者の大口篤志寄付に併せ附近関係者の寄付により、苦心数カ月の結晶は遂に予定の資金調達に成功し、ここにおいて早速敷地四百二十九坪の寄附を上申し」(『米寿』)、1922(大正11)年7月、西荻窪駅が開業した(同時に高円寺駅、阿佐ヶ谷駅も開業)。

西荻窪駅の開業をきっかけに村はその姿を大きく変えていった。

井荻村第一耕地整理事業

開業した西荻窪駅は、畑の真ん中に孤立し、駅に通じる道路は満足なものではなく、不便を極めていた。秀五郎が道路の開削を計画していたところ、井草八幡神社付近の有志から駅に通じる道路を作る話が出て、その実行方法について秀五郎に意見を求めた者がおり、これを契機に井荻村第一耕地整理組合創立の機運が高まった。

秀五郎は関係地主と協議を重ねたが

「耕地整理をすると、道路用地として耕地が減少する。耕地の減少は収入の減少であり、其の上工事費の負担金を出すのでは、生活上の脅威だ」(『杉並区史探訪』)と反対する意見が多く、なかなかまとまらなかった。そのため「道路が良くなれば農作業が楽になる。土地の利用効率が高くなるから減少分はカバー出来る。負担金は心配するな」(同書)と夜通し議論することも度々あったという。しかし、秀五郎の誠意ある説得の結果、1922(大正11)年10月(※11)、字上井草の一部地域を対象とする「井荻村第一耕地整理組合」が設立された。

その後4年間で、秀五郎は組合長として、西荻窪の北西方向に敷地面積12万2千坪(約40.3ha)の宅地造成を実施し、道路網も整備した。

そして、この耕地整理事業の先行実施を踏まえて、全国でも屈指の大規模な「井荻町土地区画整理事業」が実施されたのである。

井荻町土地区画整理事業

杉並区の地図を見ると、区の北西部の区画が基盤の目状になっていることがうかがえる。これは、内田秀五郎が中心となって行った土地区画整理事業によるものである。

急激な郊外の発展

1919(大正8)年に発布された「都市計画法(旧法)」を受けて、井荻村は1922(大正11)年に都市計画区域に設定された。「当時の井荻村は、城西の一農村にして、戸数僅かに六百余戸、宅地田畑を通じ六百八十余町歩、山林原野にて百五十余町歩を占め、武蔵野の俤を偲ぶに足る、長閑な村落であった。」(『傳』)ところが、翌年の関東大震災を契機に、東京市内から郊外への移住者が激増。「昨日の畠に今日は家が建つ」といわれる状況となった。

井荻村土地区画整理組合の設立

秀五郎は「今のうちに道路を整備拡張しておかなければ、悔を百年後に残す」と考え、無秩序な宅地開発が進まないよう、土地を整理して宅地化を進める

井荻村全村の土地区画整理を計画し、村会議員や有力者に提案した。しかし、耕地の減少や工事費の負担金を危惧する反対者が多く、中には「村長を殺せ」と村役場に押しかけて来て、計画の中止を求める人(『杉並区史探訪』)もいたという。だが、秀五郎は将来必ず村全体の利益になるという信念で反対者の説得に飛び回り、ようやく法定数に達する地主の賛成を得、1925(大正14)年9月24日に「井荻村土地区画整理組合」(後に「井荻町土地区画整理組合」に改称)の設立認可にこぎ着けた。

うよきよせつ

紆余曲折の船出から事業完了まで

ところが、認可が下りた直後に、上荻地区から脱会の申し入れがあった。この地域は西荻窪駅付近にあり、区画整理をしなくても買い手や借り手に不自由しておらず、工事期間中に土地の売買を制限されたくないという理由などからであった。やむなくこの地区を除外し、区画整理地域を六工区に分けて、1926(大正15)年11月に工事に着手した。

工事は関係者の協力で順調に進捗



区画整理前の井荻地区俯瞰(ふかん)図
(出典:『事業誌』)

左:井荻町土地区画整理組合の記念写真。前列左から3人目が内田秀五郎(出典:『区画整理事業写真帖』)
右:右側の質素な建物が井荻町土地区画整理組合事務所。奥の建物は井荻町町役場庁舎(出典:『事業誌』)



左:区画整理直後の第八工区(現西荻南4丁目付近)(出典:『事業誌』)
 右:区画整理直後の放射六号(青梅街道)(場所の詳細は不明)(出典:『事業誌』)



左:区画整理直後の第一工区(現荻窪2丁目付近)(出典:『事業誌』)
 右:井荻信用組合本店屋上より見た区画整理後の井荻町西部方面(出典:『内田秀五郎翁』)



井荻町土地区画整理碑。
 総高7.2mと区最大の記念碑。
 杉並区登録有形文化財(古文書)
 (撮影協力:井草八幡宮)

し、「日が経つにつれて、台地は削られ、湿田は埋め立てられて平坦となり起伏錯綜した農地は、碁盤の目のように縦横に走る道路で、整然と区画され、美しい住宅地になって」行った(『杉並郷土史学会会報第57号』)。この状況を目の当たりにした上荻窪地区から1928(昭和3)年に再加入の申し入れがあり、第七、第八工区を追加して工事を続行した。

1935(昭和10)年1月、第八工区を最後に全工区の工事が竣工。同年3月の換地処分(※12)をもって井荻町全域の区画整理事業はおおむね完了した。土地の減少率は5%(※13)で済み、『杉並区史探訪』によると、心配された工事費の負担金は組合保有地の売却金で賄われ、地主は一銭も出さずに済んだという。

その後も、「換地の登記や清算が進められて、最終的には1941(S16)年3月31日の組合会で解散の議決が行われた。同年12月28日付けの内田組合長の挨拶文がついた清算残務終了の報告が12月31日に全組合員に対して」なされた(『研究』)。

全国屈指の大規模な土地区画整理事業

井荻町土地区画整理事業は、組合設立からすべての換地処分の完了まで約10年、清算の完了まで約16年に渡っての壮大な事業であった。区画整理の総面積は約880町歩(約880ha)におよび、「単一町村独自で行った事業としては、全国屈指の大規模なもので、街づくりとしてもすぐれたものであった」(『杉並区の指定登録文化財』)。

地 区 路 線 図



区画割図(出典:『事業誌』 ※挿図に加工)

1935(昭和10)年3月、区画整理事業の完成を記念して刊行された『事業誌』の巻頭言で東京府知事・横山助成は「後年全国土地区画整理事業史を編むの時あらば、地区の濶大にして用意の周到なる且つ進程の速やかなりしこと本組合に於けるが如きは宜しく特筆し

て、光輝ある其の成果を表彰すべきなり」とその偉業をたたえた。1940(昭和15)年5月、井荻八幡宮東参道北側の境内に、井荻町土地区画整理組合によって井荻町土地区画整理碑が建てられた。碑の正面には区画整理事業の経過が、裏面には整理組合の役員132名の名が刻まれている。

同時期に展開された各種事業

土地区画整理事業と前後し、インフラ整備をはじめ、井荻の発展につながるさまざまな事業が行われた。ここでは、整理事業と平行して展開した四つの事業を紹介する。

①井荻町営水道の敷設

秀五郎は「区画整理で道路が整備され、下水溝ができて、上水道がなければ、仏作って魂入れずだ」(「杉並郷土史会会報第57号」と、1928(昭和3)年9月に善福寺池畔を水源とした町営水道建設案を町議会に提出した。しかし、



左: 1927(昭和2)年、旧井荻水道敷設のため善福寺池畔にて水量試験中の秀五郎(左端)(出典:『内田秀五郎傳』)
中: 善福寺池畔より杉並浄水場(旧井荻水道)を望む(昭和11年頃)(出典:『内田秀五郎翁』)
右: 杉並浄水場

どの家にも井戸があるので水道を引く人はいない、財政に余裕がない、という時期尚早論が大半を占めた。

1928(昭和3)年5月に町長を辞めて、当時東京府会議員の秀五郎は、反対派の町会議員に会い「井荻町は近い将来、東京市内に編入され、発展が予約されている。それには水道がどうしても必要なのだ」(同会報)と水道の必要性を説いた結果、同年9月の町議会で工事費65万円の水道実施計画案が全会一致で可決された。直ちに水道敷設委員会を作り、自ら委員長となって、国へ水道工事施工の認可と起債の許可、補助金の交付申請を行った。

だが、大蔵省から起債の許可が下りる直前の1929(昭和4)年7月に政変が起こり、田中立憲政友会内閣が倒れ、浜口立憲民政党内閣が成立した。秀五郎は浜口内閣の反対党の立憲政友会所属の議員だったため、申請は不許可となった。

しかし、秀五郎が「水道事業は、住民の保健衛生上欠くことのできない都市施設で、政党、政派を超えて許可されたい」と根気強く運動した結果、翌年10月に工事の認可と、577,700円の起債が許可された。

『井荻町第一期水道抄誌』によると1931(昭和6)年2月、工事中。4月善福寺池西岸の畔に集水井戸を掘り、

ポンプで浄水場へ揚水する工事を行い、1932(昭和7)年4月から一般家庭への給水が開始された。

後年、秀五郎は当時を回想し「これまで、ポンプ井戸や、つるべ井戸で骨を折っていたのに、栓を一つひねればちゃーッと水が出て来るのですから、大変なものです。さきにはランプが電燈になり、いままた井戸が水道に代る。このよろこびはひとしおのがあります」(『今昔』)と語っている。

1932年10月1日、井荻町が東京市に編入されると共に、井荻町営水道も東京市水道局に引き継がれ、杉並浄水場と改称。23区内唯一の地下水源として周辺の地域に給水していたが、2016(平成28)年12月28日から運用が停止されている。

②西武鉄道の開通と3駅設置

1926(大正15/昭和元)年、土地区画整理の工事中に、西武鉄道村山線が井荻村の北部を通ることとなった。『杉並風土記 上巻』によると、当時この路線は村山急行電車と呼ばれ、急行の性質上、駅間の距離は1マイル(約1.6km)以上とする建設内規があったことから、当初井荻駅のみが設置される予定であったという。

秀五郎は、距離の内規から外れるが、町内に3駅の設置を要望したところ、西

武鉄道側から乗降客が少なく採算が取れないと断られる。そこで遊園地などを造って行楽客を誘致すれば、採算がとれるだろう。その敷地を提供するからどうかと交渉。その案が受け入れられ、2.4kmの区間に上井草、井荻、下井草の3駅が開設された。なお、駅の敷地は三町(約330m)以内の地主から寄付され、関係地主も少なからぬ犠牲を払ったと『翁』などに記されている。

西武鉄道村山線の始発駅は高田馬場だったが、1952(昭和27)年に新宿まで延長され、路線は新宿線と改称された。

上井草球場

『杉並風土記 上巻』によれば、整理組合は3駅設置の見返りに、上井草の整理組合保有地から18,000坪の土地を、営利を目的としない公共事業にのみ使用することを条件に西武鉄道に提供した。1927(昭和2)年、西武鉄道はここに、トラックやプールなどを有する遊園地(※14)を造成したが、利用客が少な

く、野球場を造ることに方針を転換した。

1936(昭和11)年8月、敷地面積約13,600坪、収容人数約3万人の上井草球場(当初の正式名称:東京球場)が完成した。だが、翌年に後樂園スタジアム(のちの後樂園球場、現東京ドーム)が誕生すると、以後、東京での職業野球は後樂園を中心に行われるようになった。

戦後、東京都は西武鉄道から土地を買い取り、1967(昭和42)年に都立上井草総合運動場を建設。その後、杉並区に移管され、現在は上井草スポーツセンターとして利用されている。

③中島飛行機東京工場

現在、「区立桃井原っぱ公園」がある桃井3丁目付近には、1924(大正13)年から1945(昭和20)年まで中島飛行機東京工場があり、井荻地域はこの工場建設により更なる発展を見せた。

中島飛行機は、1917(大正6)年、中島知久平が群馬県尾島町(現太田市)に



左:西武新宿線下井草駅(1953(昭和28)年)。(写真:杉並区立郷土博物館)
中:井荻一下井草間を走る西武電車(1953年頃) (写真:杉並区立郷土博物館)
右:平成15年度特別展「上井草球場の軌跡」展示図録(杉並区立郷土博物館)

立ち上げた航空機メーカーである。東京進出を図り、1923(大正12)年秋以降、東京郊外で交通の便が良い青梅街道沿いの中野や成宗付近で土地を探したが、住民の反対に遭^あい、次に候補となったのが井荻村であった。

当時、村長であった秀五郎は、地主らと群馬県の太田工場を視察したところ、工場による悪影響は見られず、むしろ太田町の大きな財源となっているのがわかった。こうした状況から、村議会は工場誘致に傾きつつあったが、地域住民から公害や騒音などを懸念する声が上がった。そこで秀五郎は、中島に対して「溶鉱炉を使用井戸水を枯渇せしめず、太田工場より大なる煙突を作らず、音響により桃井尋常高等小学校に支障を与えず、毒物を下流に流さず」(『翁』)という四つの条件を提示した。この条件を中島は承認し「村当局に対し、一札入れる」(※15)ことをも承諾した(『翁』)のであった。大正年代にこういった公害防止に関する協定を結んだことは画期的なことであった。

1925(大正14)年11月に工場は完成し、発動機(エンジン)生産を開始。「開所

当時における徒弟職工の募集に当っては、井荻在住者を優先入所せしめ、其の後拡張に拡張相次ぎ、幾千に上る従業員を擁し、その敷地は、宿町の大半、二万六千有余坪を算した」(『翁』)という大工場に成長して行った。(※16)このため、雇用が創出され、工場の周辺に貸家や住居、商店が開かれ、市街化が促された。

④教育施設の充実

小学校の増設

区画整理開始前の井荻村の学校は、桃井第一尋常高等小学校(現区立桃井第一小学校)と、その分教場があるのみであった。

関東大震災の影響から移住者がにわかに激増したため、大正末期から昭和初年にかけて、住民から学校増設を望む声が増していった。当時の財政では、収入の約6割を教育費に充てており、住民の教育への関心も高かった。小学校の新設にあたっては、公平に方策を講じないと集落間の抗争になりかねなかった。そこで、秀五郎は将来の地域発展を考慮の上、井荻全図に円形を描いて通学区域を何度も検討し、五校制とす



左：中島飛行機東京工場(1936(昭和11)年)。写真の紹介文に「本邦に於ける軍需工場の王者」とある(出典：『躍進の杉並(昭和11年度版)』)

右：中島飛行機附属病院(1936)。戦後、規模を拡大して総合病院の荻窪病院となった(出典：『躍進の杉並(昭和11年度版)』)

る案を立てた。1927(昭和2)年10月、これを町議会に諮ったところ、「実に名案なりと聊かの異論もなく満場一致の賛成を得」た(『米寿』)。

翌1928(昭和3)年には第二、第三、1932(昭和7)年には第四、1934(昭和9)年には桃井第五尋常小学校が新設された。

府立農芸学校移転と昇格拡張

現在、杉並区今川にある東京都立農芸高校は、1900(明治33)年に「中野町外13ヶ村組合立農業補習学校」として中野町に創設された。

その後、組織変更により豊多摩郡立農業学校となったが、学校付近の発展に伴い敷地が手狭になり、1925(大正14)年東京府会において、府中農蚕学校と合併し、府中に移る議案が上がった。当時、府会議員であった秀五郎は、在校生の通学などを考慮して、合併論に真っ向から反対した。最終的に秀五郎の郡内移転案が通り、校名を東京府立農芸学校と改め、1929(昭和4)年に現在地

への新築移転を完了した。

その後、秀五郎は同校を乙種3年制から甲種5年制に昇格させるため当局と折衝し、1933(昭和8)年3月、甲種実業学校に昇格させた。また、昇格と同時に同校の大拡張のために奔走し、予算20万円をもって3カ年継続事業の施行を府議会で議決し、校地拡張と建築を進め施設の充実を図った。

1943(昭和18)年、都制施行により東京都立農芸学校と改称。1950(昭和25)年、現在の東京都立農芸高等学校に校名を変更した。創立以来、東京の都市農業および関連産業に従事する優れた人材を輩出し、現在も多くの卒業生が活躍している。

風致地区にかけた内田秀五郎の情熱

内田秀五郎は、土地区画整理事業で大規模な宅地造成を実施する一方、自然保護のため風致地区(※17)の保全に全力を尽くした。

1930(昭和5)年10月、善福寺池を中



左: 桃井第一尋常高等小学校(昭和初期)。(出典:『躍進の杉並(昭和11年度版)』)
 中: 1938(昭和13)年の校舎全景(写真:東京都立農芸高等学校)
 右: 桃井第五尋常小学校(1934年)。(出典:『桃五小50周年誌』)



左: 社団法人善福寺風致協会役員。前列右から2人目が内田秀五郎(出典:『善福寺池五十年の歩み』)

右: 善福寺風致協会役員によるボート池の整備作業風景(出典:『善福寺池五十年の歩み』)

心とした60.4haが風致地区に指定された。この保護推進のため、府会議員だった秀五郎は風致協会の設立を呼びかけ、1934(昭和9)年10月、「社団法人善福寺風致協会」が設立されると会長に就任。私財も投じ、合計約1万坪の土地を確保して、東京府に寄付した。

協会は東京府と共同で善福寺池の拡張工事を行い、土砂が堆積していた池を復旧。また、遊歩道の建設や、植樹、稚魚の放流、ボート事業にも力を注いだ。次いで、善福寺川沿いの荒れた田んぼを開削し、1943(昭和18)年春には新池(下池)を作り上げた。

1953(昭和28)年、善福寺風致地区内に秀五郎の喜寿を記念して銅像が建立された。1956(昭和31)年には建設省告示による都市計画善福寺緑地の事業決定により公園化が進められ、1961(昭和36)年6月に「都立善福寺公園」が開園した。

協会発行の最後の記念誌『遅野井 善福寺風致協会の足跡』は、「初代内田秀五郎会長のことは「郷土の風景を守ることは私達の義務であり、責任である」こ

の言葉ほど善福寺池に相応しい言葉は見当たりません」と記している。

政治家・秀五郎

1924(大正13)年6月の東京府会議員当選から1947(昭和22)年5月の東京都議会議員引退まで、約23年間、政治家として活動した(※18)。

東京府会・市会議員時代

最初に府会議員に立候補したのは1923(大正12)年9月であったが、関東大震災のため選挙は翌年6月に延期された。秀五郎は初めての洋服にわらじ履き姿で、毎日豊多摩郡全域を駆け回り、新人ながらトップで当選した。以降、4回の選挙で第2回目を除きトップ当選を果たしている(※19)。

1924年立候補時のスローガンは、東



京府の「三部制経済の撤廃」である。当時は「市部経済」「郡部経済」「連帯経済」の3部に分

「東京府会議員候補者 内田秀五郎」選挙ポスター(1928(昭和3)年)(出典:杉並区立郷土博物館)

けて経済政策が立てられており、豊多摩郡のような郡部は軽視されがちであった。この差別の廃止は1932(昭和7)年10月、東京市の市域拡大により実現した。

府会議員を1943(昭和18)年7月まで5期19年務め、かつ1932年10月から1943年までは東京市会議員としても活躍。この間、市会土木委員長として「東京市土木事業五十年計画」を策定した。

東京都議会議員

1943(昭和18)年、第1回都議会議員選挙が9月13日に行われ、秀五郎は当選し、1947(昭和22)年5月まで都政に携わった。その間、都議会議長を2期務め

ている。

終戦前後の4年間は、都の食料対策に取り組んだ。特に終戦直後の都の食糧不足はひどく、都議会議長として北陸方面に食料懇請行脚に出かけるなど大変苦勞したと『今昔』に回想している。

また、戦災により人口が極度に減少した区も多く、戦後復興を考える上で、当時35区あった区を整理統合して規模の適正化を図る必要があった。この整理統合については、1946(昭和21)年7月から「区域調整委員会」(内田秀五郎は9月から座長に就任)において検討が進められ、翌年3月、35区は22区に整理統合された。

日本農政界の第一人者

1907(明治40)年に井荻村村長に就任すると同時に井荻村農会長(その後井荻町農会長)になり、井荻町長を退任するまで21年間にわたり農民の指導啓発、農業技術の改善向上に尽力した。

1942(昭和17)年12月、東京都農会長に就任。戦時下の都農業、農民のために努力を払ったが、敗戦により公職を追放された。後年、

戦前			
1907(明治40)年	5月	30歳	井荻村農会長(後に井荻町農会長)
1926(大正15)年	2月	49歳	豊多摩郡農会長
1932(昭和7)年	10月	55歳	東京府農会副会長
1942(昭和17)年	12月	66歳	東京都農会長
戦後 ※パーズ解除後			
1951(昭和26)年	7月	74歳	東京都農業委員会会長
"	11月	75歳	東京都農業委員会連合協議会長
1952(昭和27)年	4月	75歳	全国農業委員会協議会長
1954(昭和29)年	7月	77歳	東京都信用農業協同組合連合会長(信連)
"	"	"	東京都農業協同組合指導連合会会長(中央会) ※昭和30年に「東京都農業協同組合中央会」に改称
"	"	"	東京都経済農業協同組合連合会会長(経済連)
"	8月	"	東京都農業会議会議長
"	11月	78歳	全国農業会議所会長

秀五郎の農政関係の主な経歴 ※『米寿豊五郎翁』問歴を基に加筆・作成

秀五郎は「昭和二十四年（一九四九年）には追放令にひっかけられて、パージ（※20）組にはいらされましたので、わたくしはここで一切の公職を辞任して、やっと身軽になることができました」（『今昔』）と語っている。ところが、2年後にパージが解除となると、秀五郎は再び多くの農業団体の長を務め（P17表参照）、最終的にはわが国の農政推進の第一人者「全国農業会議所」の会長となるに至ったのである。

その後も農林大臣の顧問、農林中央金庫の理事など、農業団体の要職を歴任した。

『今昔』の最終章「わたくしの農政雑感」で、秀五郎は農政に対する思いを次のように語っている。「わたくしは農家の生れであり（中略）しんからの百姓だということをおぼれたことはありません。そんなわけで、農業団体からたのまると、その任でないことは承知でも「農村のためになることなら…」と考えて、ついひきうけてしまうのです。しいていえば、土の感覚と思想が、わたくしの生涯をつらぬ

いていたといえるでしょう」

農産物流通会社を経営

秀五郎には実業家としての側面もある。農産物流通の会社を興し、後半生はこちらが主力となった。

「新宿青果株式会社」の設立、淀橋分場の開場

東京市は第1次中央卸売市場建設計画の後、第2次計画として新たに四つの分場の開設を決定。その一つが淀橋分場で、「東洋青物市場株式会社」に私設12市場会社を統合し、単一の卸売会社を作る計画を立てた。ところが、参加13市場が単一派と複数派に分かれて対立。秀五郎は淀橋分場建設の主唱者であったことなどから、陰に陽にあっせんを努めていたが、その意を果し得ないでいた。そこで、窮余の策として、単一派の11市場で卸売会社を組織し、1938（昭和13）年5月、「新宿青果株式会社」を設立。代表取締役社長に就任し、複数派の2市場に対して粘り強く説得を続けた。その結果、同年10月和解に至り、当初の



1954（昭和29）年1月22日、全国農民大会で演説する秀五郎（出典：『東京農業の今昔』）



淀橋市場の全景（1969（昭和44）年頃）。三角屋根が戦前の建物の面影を残す（写真：東京都中央卸売市場淀橋市場提供）



左：米寿を祝して贈られた寿像と福寿衣を着た秀五郎

右：1963（昭和38）年3月歌舞伎座で開催された秀五郎の米寿祝賀会の様子（出典：『米寿秀五郎翁』）

計画通りで到着した。

戦後も、淀橋分場の敷地の拡張と売場の増築の実現、さらに、杉並、松原、練馬の配給所についても順次拡張整備や再配置に献身的に協力するなど、当分場の発展に大きく貢献した。

「海外物産貿易株式会社」

「東京新宿青果株式会社」と同じく、秀五郎が青果物流通の経営に携わった会社には「海外物産貿易株式会社」がある。

1948（昭和23）年、戦時中に途絶えていた台湾バナナ輸入を復活させるため青果業界の有力者らと相談し、「海外物産貿易株式会社」を創設した。苦労の末、1949（昭和24）年に念願の民間輸入に成功。以降、着実に業績を伸ばし、バナナ専門輸入業における屈指の代表会社に成長した。1956（昭和31）年、台湾バナナが台風被害により大減産となった際

財団法人内田農業振興会の設立は秀五郎の1964（昭和39）年の叙勲（勲三等瑞宝章）の記念事業でもあった。1971（昭和46）年、秀五郎は勲三等旭日中綬章も授章した（写真：公益財団法人内田農業振興会提供）



には、80歳の高齢であったが、飛行機で北京に飛び、初めて広東バナナ輸入の道を開いた。1963（昭和38）年、バナナの輸入が自由化されると、価格も下がり、現在も身近な果物として定着している。

「財団法人内田農業振興会」の設立

1967（昭和42）年1月、秀五郎は東京の農業の振興と後継者の育成を目的として、自ら拠出して「財団法人内田農業振興会」を設立し、初代理事長に就任した。その後、一般財団法人へ移行し、2021（令和3）年には「公益財団法人内田農業振興会」となった。秀五郎の遺志を引き継ぎ、これまでに農業の先進事例の調査研究や農業後継者育成のための助成事業を行うとともに、農業の発展・振興に功労のあった者や団体に対して顕彰事業を行い、1,600名以上を表彰している（令和3年度末現在）。

杉並の巨星

秀五郎は1975（昭和50）年7月26日、西荻北の自宅で98歳の天寿を全うし

た。長く床に就くということもなく、亡くなる10日ほど前まで吸い飲みで酒を飲んでいたという。

8月5日の秀五郎の葬儀は、地元にある戦国大名今川氏ゆかりの観泉寺で、「東京新宿青果株式会社」、「東京都農業協同組合中央会」、「東邦信用金庫」など、秀五郎とつながりが深い11団体の合同葬で営まれ、5,000人を超す人々が不世出の「杉並の巨星」を悼んで会葬した。

※1 篤農家：農業に携り、その研究・奨励に熱心な人

※2 桃井学校：『今昔』を引用。『杉並区教育史 上巻』によると1882(明治15)年に「桃井小学」に改称。現在の区立桃井第一小学校

※3 当時の徴兵制度には、官吏や戸主・嫡子といった各種の免役条件があったが、時代が下るに従って、そうした特権は廃止されていった

※4 戊申詔書(ぼしんしょうしょ)：国民に勤儉節約と国体尊重を徹底する目的で1908(明治41)年(戊申の年)10月13日発布された詔書。教育勅語とともに明治期発布された国民教化の二大詔勅

※5 産業組合：1900(明治33)年の産業組合法によって設立された日本の協同組合。現在の農業協同組合、信用金庫などの母体となった

※6 『今昔』には「第一井荻信用購買販売組合」と記されているが、『翁』『傳』『米寿』ではその記述がなく、設立を1909(明治42)年12月とする「井荻信用購買組合」が記されている。設立年は1年違うものの、設立時の組合員数、在任期間(1918(大正7)年11月まで、10年間)を勘案すると同一組織と判断されるため、ここは秀五郎の著書『今昔』の記述に従った

※7 1934(昭和9)年に組織及び名称を「井荻信用組合」と改めた後、1951(昭和26)年11月に「東邦信用金庫」と改称。現在は「西武信用金庫」に合併されている

※8 その後、1927(昭和2)年に、荻窪駅南側の現在の荻窪4丁目に新築移転。1936(昭和11)年12月、荻窪駅前郵便局に改称

※9 逓信省(ていしんしょう)：かつて日本に存在していた郵便や通信行政を管掌した中央官庁。1949(昭和24)年、郵政省と電気通信省に分離した

※10 その後、加入者の増加により、1932(昭和7)年に「荻窪電話局」が荻窪3丁目(現荻窪4丁目)に新築開設された

※11 『井荻町土地区画整理の研究—戦前期東京郊外の形成事例として—』によると、東京市資料「都市計画道路と土地区画整理事業」では設立認可は1923(大正12)年となっているため、1922(大正11)年は発起人会の設立と思われる、とある

※12 換地処分：区画整理事業によって、従来その区画に土地を所有していた人に新しく割り当てられる土地を「換地」といい、土地所有者に換地を割り当てることを「換地処分」という

※13 森泰樹著『杉並区史探訪』に、土地の減少率は「実測7%(区史では5%)と書いているが、『井荻町土地区画整理の研究』で森の7%の根拠あるいは類例の既述を見出すことができなかった」としていることから、本記事における土地の減少率は、『杉並区史』記載の「5%」に準じた

※14 『上井草球場の軌跡』には、遊園地ではなく「上井草競技場」を造ったと記されている

※15 保証・約束・謝罪などの意を示す文書を書いて相手方に差し出すこと

※16 元従業員の証言によれば、「1943(昭和18)年頃の荻窪工場(東京工場を名称変更)の従業員数は5、6,000人に増えていた」という(『中島飛行機 軌跡と痕跡』)

※17 風致地区：都市の豊かな自然環境を維持するために、自治体が保護を行う地域

※18 『米寿』の閲歴から、当時は村長・町長のまま府会議員になることができたこと、府会議員と市会議員の重複も可能であったと読み取れる

※19 選挙区は第1回から第3回までは豊多摩全地域、第4回目以降は杉並区全域

※20 パージ：purge(追放)。戦後、日本占領中の連合国軍総司令部の覚書に基づいて、戦争指導者や協力者などを公職から追放したこと。公職追放

取 材:進藤鴻一郎

撮 影:進藤鴻一郎

参考文献:『内田秀五郎翁』(須田愼六/1936年)/『内田秀五郎傳』(井口泰吉/1952年)/『米寿秀五郎翁』(鈴木市太郎/1963年)/『東京農業の今昔』(内田秀五郎/1957年)/『井荻町土地区画整理の研究—戦前期東京郊外の形成事例として—』(高見澤邦郎/2006年)/『杉並区史』(東京都杉並区/1955年)/『新修杉並区史』中巻・下巻(東京都杉並区/1982年)/『杉並・まちの形成史』(寺下浩二/1992年)/『杉並区史探訪』(森森樹/1974年)/『杉並風土記』(森森樹/1977年)/『杉並郷土史会会報第57号』(杉並郷土史会/1983年)/『杉並郷土史会会報第295号』(杉並郷土史会/2022年)/『目で見る杉並区の100年』(郷土出版社/2012年)/『事業誌』(井荻町土地区画整理組合/1935年)/『杉並区教育史上巻』(東京都杉並区教育委員会/1966年)/『評伝内田秀五郎』(寺下浩二/2022年)/『新興の郊外井荻町誌』(玉井廣平/1928年)/『官報第七千五百九十二号』(1908年10月14日)/『官報第二千九百七十七号』(1936年12月3日)/『むかしの杉並古老座談会文化財シリーズ1』(杉並区教育委員会/1970年)/『杉並区の指定登録文化財』(杉並区教育委員会/1996年)/『井荻町第一期水道抄誌』(井荻町役場/1932年)/『すぎなみの地域史III 井荻』(杉並区立郷土博物館/2020年)/『上井草球場の軌跡』(杉並区立郷土博物館/2004年)/『荻窪の記憶IV 清水・桃井・今川の歴史』(荻窪地区区民センター協議会/2022年)/『中島飛行機軌跡と痕跡』(杉並区区民生活部産業振興課/2013年)/『中島飛行機の技術と経営』(佐藤達男/2016年)/『巨人中島知久平』(渡部一英/1955年)/『躍進の杉並』昭和11年発行(躍進の杉並刊行会/1936年)/『百年史』(東京都立農芸高等学校/2001年)/『学校要覧』(東京都立農芸高等学校)/『桃小50周年誌』(桃井第五小学校)/『善福寺池五十年の歩み』(善福寺風致協会/1989年)/『遅野井善福寺風致協会の足跡』(善福寺風致協会)/『東京都市計画物語』(越沢明/2001年)/『石神井・善福寺公園』(佐藤保雄、田中進/1981年)/『善福寺風致協会の活動の変遷についての研究』(中島直人、西村幸夫、北沢猛他/2000年)/『都史資料集成II第2巻[成立期の東京都]自治体東京都の発祥』(東京都/2015年)/『東京都政五十年史通史』(東京都/1994年)/『東京都議会歴代議員略歴集録』(東京都/1997年)/『東京都農協二十年史』(東京都農協二十年史編纂委員会/1971年)/『東京都農協三十年史』(農協法施行三十周年東京都農業協同組合記念事業実行委員会/1981年)/『内田農業振興会創立50周年』(一般財団法人内田農業振興会)/『淀橋市場の菜』(淀橋市場開場三十周年記念祝賀会)/『市場のしおり-東京都中央卸売市場概要-』(東京都中央卸売市場/2021年)/『東京新宿青果株式会社社沿革』(東京新宿青果株式会社)/『DVDありがとう杉並分場』(東京新宿青果株式会社)/『杉並新聞(1975年8月25日号)』

杉並区公式ホームページ「内田秀五郎のしごと」/国立国会図書館ホームページ デジタルコレクション/ウェブサイト「中島飛行機物語」/東京都公文書館ホームページ 東京の行政区画〜大東京35区物語/東京都中央卸売市場ホームページ 淀橋市場のご紹介/東京新宿ベジフル株式会社ホームページ 新宿淀橋市場の歴史/国立公文書館 亜細亜歴史資料センターホームページ バナナが高級品だったってホント?/バナナ大学ホームページ バナナの歴史